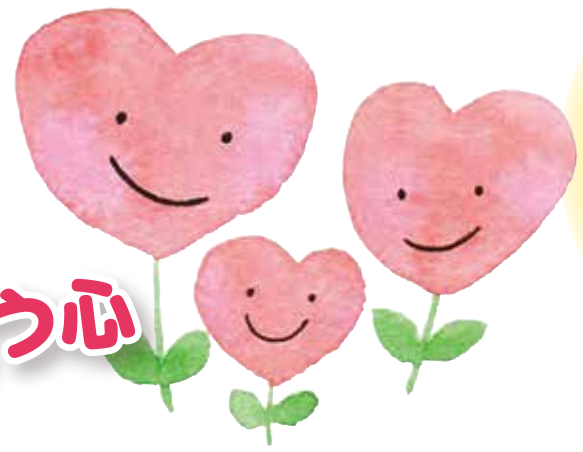
【人権協だより】

問合せ先：貝塚市人権啓発推進委員協議会事務局（人権政策課内）☎072-433-7160

みんなで築こう　人権の世紀

考えよう　相手の気持ち
未来へつなげよう　違いを認め合う心



貝塚市人権啓発推進委員協議会（人権協）は、市民一人ひとりの人権意識の確立と高揚を図ることを目的に設立され、人権尊重のまちづくりを進める啓発活動を行っています。

この1年間の主な活動は、「2019人権を守る市民のつどい」（下記）をはじめ、じんけんセミナーとして、「コロナ禍で変化した？　夫婦のコミュニケーションを考える」（10/8）、「新型コロナウイルス感染症と人権」（10/23）、「コロナ禍の今　だれも取り残さない社会を考える」（11/2）をテーマに開催しました。

2019 人権を守る市民のつどい
「写真で伝える、世界と東北の今」

フォトジャーナリスト　安田 菜津紀 さん

昨年12月に開催した「人権を守る市民のつどい」は、フォトジャーナリストの安田菜津紀さんをお招きして、紛争地や被災地に暮らす人々などの写真を通して、「写真で伝える、世界と東北の今」というテーマで、ご講演いただきました。

安田さんは、16歳のとき「国境なき子どもたち」友情のレポーターとしてカンボジアで貧困にさらされている子どもたちを取材。中東のシリアをはじめ東南アジア、アフリカなどの難民や貧困の取材を進め、また国内では東日本大震災以降、陸前高田市を中心に被災地を記録し続けています。

【講演の一部をご紹介します】

人権が踏みにじられていたり、蹂躙（じゅうりん）されているところでは、往々にして世界から目を背かれていたり、置き去りにされていることはないでしょうか。中東シリアの紛争と東日本大震災は時期をほぼ同じくして発生しました。現地でのいくつかの取材を通してお話しします。

～中東の紛争地での取材から～

シリアから隣国へ逃れた8歳の女の子です。女の子は砲弾に見舞われ右足切断を余儀なくされ、左足も重症です。私は、日本や世界に何を伝えたいですかと聞くと、「私たちは何も悪いことしていないよね。だからもうこんなことやめてって、大きな人に伝えてほしい」と女の子の声です。

大きな人って？　女の子のお母さんは、「子どもには政府軍や反政府軍、どんな勢力が関わっているかなんてわかりません。この戦争を始めた人を大きな人と表現するしかなかったのよ」と言われました。

過激派勢力「イスラム国」が「首都」を置いたラッカの住民の声です。「自分たちを本当に苦しめてきたものは、自分たちに爆弾を落としてくる勢力でもなく、過激派の勢力でもなく、これだけのことが起こっているのに、世界が自分たちに関心を寄せていないこと、その感覚がジワジワと私たちを追い詰めてきた」と悲痛な叫びでした。

～東日本大震災の被災地での取材から～

今度は東日本大震災の被災地に目を向けます。大津波に耐えたあの一本松（陸前高田市）です。私は被災地にすぐに入り、唯一シャッターをきることができたのが一本松でした。後に「希望の松」と私の写真が新聞に掲載されたとき、陸前高田のことを伝えられたと思いました。すると、この街で被災した義理の父はこう言いました。「7万本の松と一緒に暮らしてこなかった人には、これはすごい、と希望の象徴のように思えるかもしれない。しかし、毎日毎日暮らしてきた自分たちにとっては、1本しか残っていないのか、と辛くなる。波の威力を象徴するものでしかない。できれば見たくなかった」私はハッとしました。シャッターをきる前に耳を傾けることができなかったのか（気持ちを置き去りにしてしまったのではないか）、と。

最後に、仮設住宅に暮らす被災者のみなさんにシリアの子どもたちの現状をお話ししたところ、「私たちにもできることがあるよ」と言われて、翌日仮設住宅中に呼びかけて、使わなくなった子ども服をダンボール10箱以上集めてくれました。また、80歳を超えるおばあさんは、「私たちは国を追い出されるほどの目にあっていない。寒い中、隣国で避難生活をしている子どもたちのほうが辛い目にあっているのよ」とも話してくれました。

私たちが無関心でいないこと

紛争地や被災地の当事者にとって、とてもつらいことは、周りの人が無関心でいることや当事者の気持ちが置き去りにされていることです。私たちが無関心でいないことが、当事者を含めたみんなの人権を守ることにつながります。私たちに何ができるのか、私たちが無関心でない道をどのように進んでいけばよいのか。今日のお話でみなさんの心に刻まれたものがあれば、ぜひ共有していただければ本望です。と締めくくられました。